

図書・資料室だより

『女の子の幸福論』

もっと輝く、明日からの生き方』

大崎麻子 // 著
講談社 2013年

あなたの心と身体はあなたのもの。
自分の人生の中で結婚・妊娠・出産と
いったライフイベントや、キャリアの
ことを考えるときに大切にしてほしい
ことは、幸せの尺度を自分の中にしっ
かり持つことだと語る、女性のための
幸福ガイドブックです。



『私のからだは私のもの』

女も男も No.137

労働教育センター 2021年
リプロダクティブ・ヘル
ス/ライツ実現のために学
校、医療機関、国や自治
体、そして私たちが解決す
べき課題を考えます。



身体的に

精神的に

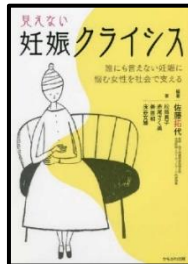
社会的に

性や子どもを産むことに関するすべてにおいて

自分らしく生きる



『誰も教えてくれなかった
子どものいない人生の歩き方』
くどうみやこ // 著
主婦の友社 2018年
子どもがいない女性は外的
プレッシャーを少なからず感
じています。お互いを否定せ
ず多様性に対応できる社会の
中で、子どもがいなくても豊
かで充実した人生を送るため
のヒントを記します。



『見えない妊娠クライシス』

誰にも言えない妊娠に悩む女性を
社会で支える』

佐藤拓代 // 編著

かもがわ出版 2021年

思いがけない妊娠に悩む女性を社会
で支え、赤ちゃんの0日死亡をなくす
ことをめざす一冊です。



『産む・産まない・産めない 女性のからだど生きかた読本』

松岡悦子 // 編

講談社 2007年

結婚・仕事・セックス・出
産・子育て…「産む力」があ
るからこそ女性は悩む。「産む
力」をうまく人生に組み込む
ために、月経とのつきあい
方、避妊法、不妊治療などに
ついて、女性の視点で紹介し
ています。

『産まないことは 「逃げ」ですか？』

吉田潮 // 著

KKベストセラーズ 2017年

不妊治療の末、「産まない」
選択をした著者。流産、中絶、
他の人の妊娠への妬み、親子連
れを見たときのつらさなどを経
験した後たどりついた、子ども
がいなくても自分の人生を楽し
むためのキーワードは「自分が
主語の人生」でした。



『産めないけれど育てたい。』

不妊からの特別養子縁組へ』

池田麻里奈/池田紀行 // 著

KADOKAWA 2020年

不妊治療、流産・死産、子宮全摘手
術を経て、それでも産めなくても育
てたいと養子縁組を選択した夫婦。「血
のつながらない子を愛せるのか？」と
いう不安はあったけれど「愛そう」と
いう努力など全く必要なく、気がつい
たら「三人家族」になっていた、と二
人は語ります。



さんかく☆ミニ講座

男女共同参画に関する言葉
を紹介します。



リプロダクティブ・ヘルス/ライツ

1994年にカイロで開催された国際人口／開発会議において提唱された概念で、今日、女性の人権の重要なひとつとして認識されるに至っています。リプロダクティブ・ヘルス/ライツ (reproductive health/rights) の中心課題には、いつ何人子どもを産むか産まないかを選ぶ自由、安全で満足いく性生活、安全な妊娠・出産、子どもが健康に生まれ育つことなどが含まれており、また、思春期や更年期における健康上の問題等生涯を通じての性と生殖に関する課題が広く議論されています。

参考：『パートナーしが2010プラン 第2次改訂版』

予告 G-NETカフェ

12月4日(土) 10:30~12:00

自分の時間を持つことが難しい子育て中の方に、ゆっくり自分に戻れる時間を過ごしてもらええる場を提供いたします。

☆おとなのためのおはなし会☆クリスマスオーナメントの折り紙など

参加・託児無料

男女共同参画絵本



『せかいでさいしょに
ズボンをはいた女の子』

キース・ネグレー：作
石井睦美：訳

光村教育図書 2020年

G-NETシネマ

モンド～海を見たことがなかった少年～(字幕作品)

10月16日(土) 13:00～ 大ホール

陽光きらめく港町ニースを舞台に、両親もなく、文字も読めず、自分がどこから来たのかも知らない少年モンドと、彼の無垢な心に触れた大人たちとの交流を描いた作品。

1995年/フランス/80分

図書・資料室 ご利用案内

- 開室時間 9:00~17:00
- 10月の休室日
4日, 12日, 18日, 25日, 26日,
- 貸出(本・雑誌) 15冊 3週間まで
(DVD) 2本 1週間まで
- お問い合わせ先(電話)
0748-37-3735 (図書・資料室直通)
0748-37-3751 (センター代表)

※新型コロナウイルスの感染拡大防止対策のため、休室日については変更になることがあります。



ちょっとむかし、女の子はズボンをはいちゃいけなかった。女の子がきることができたのは、きゅうくつなドレスだけ・・・そんなことってしんじられる？ 私たちが今、好きなものを着ることができるのは、メアリー・ウォーカーのおかげなのです。